

## 「日本語教育実習」の新しいプログラム開発と実践を目指して —キルギス共和国で実施した教育実習の課題と展望—

Practice Teaching Japanese as Foreign Language

— Objective and further prospect of pedagogical practice in the Kyrgyz Republic —

西條結人\*, ジュヌシャリエワ・アセーリ\*, ダウレットバエワ・ジャミリヤー\*,  
メデルベコワ・ Cholpon\*, 知念美和\*\*, 吉川巧也\*\*, 幾田伸司\*\*\*

Yuto SAIJO\*, Asel DZHUNUSHALIEVA\*, Zhamilia DAULETBAEVA\*,  
Cholpon MEDERBEKOVA\*, Miwa CHINEN\*\*, Takuya YOSHIKAWA\*\*, Shinji IKUTA\*\*\*

\*カラサエフ記念ビシケク人文大学 東洋国際関係学部日本語日本文学講座

\*\*鳴門教育大学大学院修士課程 学校教育研究科言語系コース（国語）

\*\*\*鳴門教育大学 人文・社会系教育部

\* Department of Japanese Philology, Faculty of Oriental Studies and International Relations,  
Bishkek Humanities University Named After K. Karasaev.

\*\* Japanese Language Education Course, Graduate school of Education (Master Course),  
Naruto University of Education

\*\*\* School of Humanities and Social Sciences Education, Naruto University of Education

### 要約

本研究は、2016年3月にビシケク人文大学で実施した日本語教育実習の成果と課題を検討したものである。本実習では、教育実習生のみならず実習先大学にとっても有意義な短期実習プログラムの開発をめざし、「日本語教育実習」「異文化学習・体験」「国際交流・地域交流」の3つの観点を設定して実習計画を作成した。本プログラムでは、現地での人的交流を通じ、両国の学生にとって国際的視野を広げる人材育成の機会とできた。

キーワード：日本語教育実習、プログラム開発、異文化学習・体験、国際交流、キルギス

### 1. はじめに

鳴門教育大学大学院言語系コース（国語）日本語教育分野では、日本語教師養成プログラムの一環として、受講生に日本語教育実習を課している。同実習は、協定校をはじめとする国内外の日本語教育機関において実施してきたが、平成27年度はキルギス共和国のビシケク人文大学に実習生2名を受け入れてもらい、実習を実施することとなった。

ビシケク人文大学は、1979年にキルギス・ソビエト社会主義共和国立ロシア語外国語大学として創立され、1991年のキルギス共和国独立にともないキルギス国立総合大学の分校として統合された。1992年、教育科学省の方針に基づき、独立した国立高等教育機

関への昇格とともにビシケク人文大学と名称を変更し、2004年にはキルギスの教育機関初の日本語日本文学講座が開設され、現在に至る。ビシケク人文大学では、これまで大学間協定に基づくインターンシップ実習生として、国士舘大学大学院修士課程の学生を受け入れてきた経緯があるが、鳴門教育大学からは2015年度が初めてであり、新規に実習プログラムを作成する必要が生じた。また、3週間という短期実習の実績が無かったため、既存のものとは異なる新しいプログラムの開発が必要となった。そこで、鳴門教育大学とビシケク人文大学の両校で連携して指導体制を組み、実習生の要望も踏まえながら、事前指導、キルギスでの研修、事後指導を体系的に行えるプログラムの開発と実践を目指した。

本稿では、今回ビシケク人文大学で実施した日本語教育実習プログラムの概要と、実習生が行った日本語教育実習、大学内外での活動と文化体験の実際を報告する。そのうえで、プログラム運営面からの報告を行い、日本語教育実習プログラムの成果と課題を考察する。

## 2. 先行研究の分析に基づく実習プログラム作成の観点の設定

実習プログラムの作成にあたって、日本語教育にかかわる実習やインターンシップを日本国外で実施することの意義と課題について、先行研究から検討を行った。

才田（2005）は、大学院生に日本語教育インターンシップを実施する狙いとして、「母国や日本での日本語教育に特化しがちな大学院生の眼をそれとは異なる多様な日本語教育現場に向ける機会を提供し、「複眼的な視野」を持つ人材、「実践に裏付けされた高度な知識と能力」を持つ人材、「言語教育プログラムの統括」が可能な人材を養成する」と述べ、近年では教育実習で得た経験が学生のキャリア開拓につながることを指摘している。お茶の水女子大学大学院日本語教育コース et. al（2014）では、授業実践の中で「学習者に寄り添う」ことを学び、学習者目線の授業の重要性を述べている実習生がほとんどであったと報告している。同大学の実習生は、複数の実習生や現地教員との協働、学生との関わりを通じて一人ではないことを実感したようである（お茶の水女子大学大学院日本語教育コース et. al, 2014, 2015）。富谷（2007）は、国内実習・海外実習で共通して見られたのは、「行動規範」「言語／非言語コミュニケーション（実習生自身の話し言葉に関して）」「授業場面の行動」「授業準備に関する学び」であると述べている。海外日本語教育実習個別に見られた学びとして「自己の既存知識についての学び」「日本語を教えることの意味に関する問い」が抽出されたと述べており、日本との距離や文化的差異、日本語の地位などに敏感にならざるを得ないことによることが示唆されている。また、海外実習の意義について、あいまいな状態や情報不足に耐え、種々の制約の中で行動する能力が必要とされるため、悪戦苦闘しながら問題解決のためのストラテジーを学ぶことができると述べている。これらの先行研究で示されている海外実習の意義としては、日本という文化・社会や日本語という言語を相対化し、実習生が自身の知識や行動原理、価値観を見つめ直す「複眼的視野」が獲得できること、不慣れな環境の中で実習に取り組むことで協働作業も含めた授業実践力の向上が見込めることなどが挙げられる。

一方、片岡（2001）では、アメリカ合衆国インディアナ州で行われた海外日本語教育実習の課題について、「実習校からの実習内容に関する情報を事前にもっと欲しかった」「実習校の先生が多忙なため、また言語的な問題で、レッスンに対する打ち合わせが十分できないことがあった」等を挙げている。関係する学校間の連絡不足に起因するこのような課題は、互いに注意することで解決できそうに見えるが、距離的にも時間的にも制約が多い海外実習では、実際には大きな障害となることが考えられる。

深澤・令（2014）は、日本語教育実習は受け入れ先大学に取っても有益であり、青年交流や実習生の実習に取り組む姿勢が受け入れ先大学の学生・教員に良い影響を与えることを示唆している。受け入れ先であるビシケク人文大学が受けるメリットもプログラム作成の観点に入れる必要がある。

これらの先行研究を踏まえて、本カリキュラムの作成に際しては、文化交流を通しての日本文化の相対化、協働作業の導入による授業力向上の促進、ビシケク人文大学が受けるメリットの確保に留意することとした。そして、「日本語教育実習」「異文化学習・体験」「国際交流・地域交流」の3つの観点を設定し、キルギスでの日本語教育を通じて、実習生が、異文化と向き合い、複眼的な視野を獲得できるプログラムの開発を目指した。また、実習計画の策定にあたっては、鳴門教育大学とビシケク人文大学の間で緊密な連絡を取ることとも心がけた。

## 3. 実習計画の策定と実習に向けての準備・支援

2015年12月、西條が、鳴門教育大学大学院で開講されている「日本語教育学演習」で、「キルギスの日本語教育事情」をテーマに Skype 交流を行った。交流授業内では、日本語教育事情だけではなく、学校教育制度やキルギスでの生活等をトピックとして扱った。この授業後に、日本語教育実習に参加を希望する学生を募集し、吉川、知念が実習生に決定した。

実習生決定後、なるべく要望に沿う形で教育実習プログラムの設計を行うため、両名に対して教育実習に関するニーズ調査を行った。調査項目は次の通りで、回答は自由記述とした。

1. キルギスのどのような教育機関で、どのような日本語レベルの対象者に教えたいか。
2. 実習先でどんな教材を使ってみたいか。
3. 実際に教育実習で取り組みたいこと、試してみたいことはどのようなことか。
4. 実習以外にキルギスで体験したいことはどのようなことか。

調査への回答を踏まえ、キルギス滞在中に実習生が参加可能な学内外の行事を組み込んで、日本語日本文学科長・氏原名美と西條が実習スケジュールを作成した。主たる実習先はビシケク人文大学とし、対象とする学習者のレベルは初級から初中級程度とした。また、中等教育機関であるビシケク市第69番学校での実習も組み入れることとした。加えて、キルギスの歴史や文化に関する施設や、在キルギス日本人が活躍している職場を見学したいとの要望もあったので、キルギス共和国日本人材開発センターやビシケク人文大学学生の企画による文化体験ツアー、ナリン市での在外公館広報事業に同行することを計画した。こうした経緯で策定した本実習の具体的なスケジュールを示したのが、下表である。

さらに、2016年1月に教育実習に向けて、キルギスの日本語教育事情、大学の設備や講座の蔵書の情報提供、ホームステイ・チューター学生の紹介、担当クラス情報・教科書・教員紹介等のガイダンスをSkypeで実施し、実習準備への支援を行った。

#### 4. 日本語教育実習プログラムの概要

##### ●実習生：吉川巧也・知念美和

吉川は日本語教育学専攻で、修了後は博士課程への進学を目指している。ロシア語の学習経験があり、媒介言語として用いることができる。知念は国語科教育

学専攻で、ロシア語の学習経験はない。修了後は日本国内の中学校国語科教員を志望している。

##### ●実習先：ビシケク人文大学日本語日本文学科

ビシケク市立第69番学校（6年生、7年生）

##### ●期間：2016年3月12日から3月31日

●指導体制：実習指導は、教授（日本語日本文学科長：氏原名美）1名、上級講師2名（西條、ジュヌシャリエワ）、講師2名（ダウレトバエワ、メデルベコワ）の5名が担当した。氏原と西條（教育実習主任指導教員）が全体の計画をデザインした後、教育実習指導グループを編成し、「教育実習」「生活支援（学内）」「生活支援（学外）」の支援に当たることにした。大学や他機関での授業見学、学内外の生活支援の窓口は指導グループ教員が担当し、実習生のサポートにあたった。その後、3週目に鳴門教育大学から幾田が合流し、6名での指導体制となった。なお、上記以外に、在キルギス共和国日本国大使館、キルギス共和国日本語教師会等の協力も得た。

●プログラムの目的と概要：本プログラムは、「日本語教育実習」「異文化学習・体験」「国際交流・地域交流」の3点から成る。「日本語教育実習」では、「観察実習」と「授業実践実習」を設定し、「観察実習」で実際の教室活動から得た学習者に対する知見をもとに、「授業実践演習」で日本語教育の実践経験を積むことを目的とした。「異文化学習・体験」については、キルギスの生活習慣、伝統文化などに触れ

	午前（8：00～12：00）	午後（12：00～17：00）
12（土）	キルギス到着／ホームステイ先に移動	
13（日）		
14（月）	観察実習①（人文大学）	
15（火）	観察実習②（人文大学）	日本国大使館表敬訪問 17:00 日本人材開発センター訪問
16（水）	観察実習③（人文大学）	ビシケク市69番学校日本語クラブ見学
17（木）	チーム・ティーチング①（人文大学）	フィードバック・授業検討会
18（金）	チーム・ティーチング②（人文大学）	フィードバック・授業検討会
19（土）	学生企画キルギス文化体験ツアー①（ブラナの塔、バラサゲン遺跡）	
20（日）	学生企画キルギス文化体験ツアー②（アラ・アルチャ国立公園）	
21（月）	学生企画ビシケク市内散策ツアー	
22（火）	在外公館広報事業（ナリン州立ナリン市子ども教育センター）	
23（水）	在外公館広報事業（ナリン市第2番学校）	
24（木）	単独実習①（人文大学）	フィードバック・授業検討会
25（金）	単独実習②（人文大学）	フィードバック・授業検討会
26（土）	2016年キルギス共和国日本語弁論大会	
27（日）	2016年キルギス日本語教育春季セミナー	
28（月）	単独実習③（人文大学）	フィードバック・授業検討会
29（火）	単独実習④（人文大学）	フィードバック・授業検討会
30（水）		チーム・ティーチング③（第69番学校）
31（木）	キルギス出発	



ることで、キルギス文化への理解を深めることを目的とした。「国際交流・地域交流」については、学生や地域住民との交流、行事への参加を通じて異文化に触れることで、友好関係や信頼関係を深め、日本文化を相対化する意識を醸成することを目的とした。

## 5. キルギスにおける教育実習生の生活

教育実習期間中、教育実習生はビシケク人文大学学生の家庭にホームステイをする形式をとった。ホームステイを選択したことについては、学生には日本語がある程度通じること、安全面への配慮とともに、実習生がキルギスに暮らす人々の生活に直接触れることで日本の生活を見つめ直す契機になると考えたことも理由である。また、日本人と緊密に接することは、受け入れ先の学生にとっても貴重な経験になると考えた。

ホームステイの受け入れに際しては、教材研究の分析や実習録の記録等を行うために実習生に1部屋を提供できる家庭であることを条件として、日本語日本文学科の学生を対象に募集した。その結果、男子2名、女子3名から希望があったので、実習生の了解を得た上で、期間中に吉川は2家庭、知念は3家庭をローテーションで回するという方法をとった。

キルギス到着後、実習指導グループが実習生に、生活面、安全面、交通安全・通学上の注意点等のオリエンテーションを行った。また、実習生には「教育実習録」を配付し、記録をとらせた。実習録は毎週末に指導教員に提出し、指導教員がチェックを行った。

## 6. 日本語教育実習プログラムの実際

### 6.1. 学内での実習・活動

#### 6.1.1. 観察実習

第1週目は、前半で観察実習と実習授業の準備を行った。観察実習は主に学部で開講されている「日本語」を対象としたが、担当予定クラスだけではなく、学部1年生から4年生まで、初級から中上級程度までの学習者の様子を観察できるように設定した。

実習生は、授業を観察しながら教育実習録を記入するとともに、会話練習の際には、学生の会話の相手をしたり、ロールプレイに加わったりした。日本語母語話者が少ないキルギスにおいては、学生にとっても教師以外の日本語母語話者と接する良い機会となった。また、授業後には学生から実習生に対して、日本文化・日本史・国際関係等の質問を行う様子が見られた。教育実習生にとっては、「生の日本語教育現場」の空間に入り、授業を観察できたことや、授業内で学生と触

れ合う機会を通じて、学生の性格や日本語能力を把握でき、実践演習に生かすことができたようである。

それぞれの授業を参観した後、授業検討会を設け、日本語学科教員が行った授業の感想を述べたり、教室活動に関する質疑応答等を行ったりした。実習生の観察は、授業を担当した教員の省察にもつながり、その後の授業実践に生かされた。

#### 6.1.2. 授業実践実習

授業実践実習は、2名によるチーム・ティーチング（以下、TT）と、実習生それぞれが行う単独実習の二段階で行った。TTは、第1週目後半に学部2年生と3年生の「日本語」クラス、ビシケク市立第69番学校日本語クラブで計3回実施し、第2週目後半以降は、学部1年生と2年生の「日本語」クラスで、単独実習をそれぞれ4回実施した。それぞれの授業後には授業検討会の時間を設け、指導教員の気づきのフィードバックを丁寧に行った。

TTでは、教育実習生に観察実習での知見や課題を踏まえて、授業内で扱う教科書・教材選定から授業構成を考えさせた。TTでは、学部2年生のクラスは『会話に挑戦！中級前期からのロールプレイ』、学部3年生のクラスは『中上級学習者のための日本語読解ワークブック』を選び、ひとり計3コマの実習を行った。単独実習では、1つのクラスを担当教員から引き継ぎ、使用している教科書を用いて授業を行うこととした。学部1年生は『J. Bridge for Beginners Vol. 2』（小山悟、2007、凡人社）、『できる日本語準拠 楽しい読みもの55 初級&初中級』（嶋田和子・できる日本語教材開発プロジェクト、2013、アルク）、学部2年生は『コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語 上級へのとびら』（岡まゆみ・筒井通雄・近藤純子・江森祥子・花井善朗・石川智、2009、くろしお出版）を使用し、学習内容と指導方法を構想し、実践を行うこととした。

ビシケク市第69番学校では、日本語クラブでの指導を行った。当該クラブでは、通常はビシケク人文大学の教員と大学院生がTTで授業を行っているが、日本人と接する機会は日本語を学ぶ第69番学校の生徒にとっても貴重な体験であると考え、本実習の機会を利用して実習生に授業担当を任せることにした。実習では、教科書を用いず、実習生の希望を取り入れながら、「絵本の読み聞かせ」、「じゃんけん列車」、「アブラハムの子」などのゲーム活動、「阿波踊り」を取り入れた実習を行った。

実習生は教育実習録に「自分自身に何が足りないのかを痛感したことが実習の収穫」であったこと、「授業検討会で複数の教員からフィードバックを得られたこと」「教案作成の際に、教員からクラスの特長や授業の構成等の助言をもらいながら作成できたこと」な

どと記述しており、肯定的に評価していた。また、帰国後に実施したアンケート（以下、事後調査）では、「フィードバックだけではなく、それを踏まえての教案作成にも好意的に協力いただいたことは、大きな支えになった。」との記述が見られた。

## 6.2. 学外での体験・交流活動

### 6.2.1. キルギス共和国日本人材開発センター訪問

本プログラムでは、学外での体験・交流活動として、キルギス共和国日本人材開発センター（略称：日本センター）を訪問し、施設と JF（Japan Foundation）日本語講座部門で行われている日本語授業を見学することを実習計画に組み入れた。日本センターの学習者は、大学で日本語を専攻している学生のような日本へ留学や日本での研究を動機に学習している学習者と異なり、趣味として、あるいは日本や日本語への興味から日本語を学習しているものが多く、授業の様子も大学とはずいぶん異なる。日本センターの授業は、『まるとと 日本のことばと文化』（国際交流基金、2013）をテキストとして用いており、実習生は、このテキストの使い方や学習者が興味・関心を持っている箇所、話題のローカライズの方法を学んだ。

### 6.2.2. 在外公館広報事業

第2週目前半には、日本大使館の在外公館広報事業で西條とジュヌシャリエワがナリン市に出張することになっていたため、実習生もこの事業に同行させることを計画した。地方都市における日本語学習の実情に実習生が触れる機会を設定するためである。この事業では、ナリン州立ナリン市子ども教育センター及びナリン市第2番学校において、日本の社会文化に関する DVD 視聴、日本語出張授業、阿波踊りレクチャー、書道・浴衣の着付けを行った。実習生は、このうち児童生徒、地域住民対象の阿波踊りレクチャーを担当した。レクチャー参加者は日本語学習未経験の者が大多数であり、実習生はジェスチャーや視覚素材（写真、DVD）を用いて説明を行っていた。そして、最後には参加者とともに阿波踊りを踊り、現地の人々と交流を深めていた。実習生のふり返りでは、「キルギス語が分からない私を子どもたちが受け入れてくれるのだろうか」という不安があったことや、「最初は、周囲の様子や子どもたちの反応を伺いながらレクチャー等を行ったため、初めはお互いに距離感があった」という思いも記述されていたが、イベントに参加することにより、キルギスの地方教育機関での日本語・日本文化熱を肌で感じ取ることができたようである。

### 6.2.3. キルギス共和国日本語弁論大会

第2週目末の3月26日に「2016年キルギス共和国日本語弁論大会」が開催された。この機会を捉え、出

場者のスピーチ後、スピーチの内容に対して質問をする係である質問員を実習生に委嘱し、大会へ参加してもらうこととした。

また、弁論審査時間中に「アトラクション（日本・キルギスの伝統的な踊り、合唱、大江戸太鼓、ソーラン節等）」が行われたが、教育実習生はビシケク市立第69番学校の学習者とともに参加し、来場者を対象に阿波踊りの披露とレクチャーを行った。審査員や出場者、来場者を巻き込んで阿波踊りを踊り、会場全体が大いに盛り上がった。

### 6.2.4. キルギス日本語教育セミナー

翌3月27日に「2016年キルギス日本語教育春季セミナー」がビシケク人文大学で開催された。本セミナーは毎年春と夏の年2回企画、実施されており、今回はキルギス共和国日本語教師会（会員数33名）とビシケク人文大学東洋国際関係学部の共催で行われた。今回の春季セミナーには、オシユ市やナリン市、カラコル市近郊地区などの地方都市で活動する日本語教師や、ビシケク市内の大学院生が参加し、35名が受講した。

セミナーは、「基調講演」「日本語教育事情・実践報告」「研究発表」の三部構成で行われた。「基調講演」は幾田が「言語教育と教員養成－国語と外国語」というテーマで行い、日本の言語教育事情を紹介した。第二部「日本語教育事情・実践報告」では、各機関の教師が、学習状況や使用教材、日頃の実践で工夫しているところを報告した。第三部「研究発表」では、漢字の構造や動画制作を用いた日本語授業の実践研究、高等教育機関における初級日本語教科書の分析、キルギスの初等・中等機関におけるキルギス語及びロシア語教育（母語教育）の現状と課題についての発表が行われた。

実習生は、キルギスの日本語教育事情だけではなく、キルギス国内の言語教育政策、非漢字圏学習者の漢字の捉え方、漢字学習ストラテジーに興味を持ち、発表に対しても積極的に質問した。また、キルギス国内で日本語教師として活躍する教員の発表する姿を見て、刺激を受けたとふり返っている。セミナーを通してキルギス人教員と交流をすることは、今後の実習生自身の研究課題、将来のキャリア形成の参考になった。特に吉川にとっては、海外の教育機関で日本語教員として勤務し、現地日本語教員と協働することへの意識付けが高まった。

## 6.3. 学生企画キルギス文化体験ツアー

実習期間中の第1週目の週末に、学生が企画したキルギス文化体験ツアーを実施した。学生にキルギスの歴史や文化を体験できるような企画を考えてもらい、教育実習生を案内するプログラムを設定した。学生企画によるキルギス文化体験ツアーは、3月19・20・21

日の3日間行われ、19日は学部2年生、20日は学部3年生、21日は全学年から文化体験ツアーへの参加を希望した学生が中心になって企画した。19日は、チュイ州トクモク市にあるブラナの塔・バラサグン遺跡に案内した。このツアーでは、東洋文献学（歴史）を専攻する学生を中心に、キルギス史や文化遺産の解説を日本語で行う姿が見られた。実習生にとっても、キルギスの歴史・文化を学ぶ機会となった。20日は、学部3年生を中心に、ビシケク市郊外にあるアラ・アルチャ国立自然公園に行き、ハイキングを行った。1日目よりも、歴史や文化に触れる機会は少なかったようではあるが、キルギスの自然を見聞するだけでなく、実際に訪れ、体験することで、肌で感じることもできたようである。また、学生とも積極的に交流し、実習授業に備え、クラスの雰囲気や学生のニーズ把握に努めていた。21日は、ビシケク市内を散策し、「ノールーズ（拝火教の祭りを起源とする新年を祝う日）」に行われる伝統的な行事や習慣を体験した。特に、ククボルと呼ばれる騎馬ラグビーを見学し、キルギスの文化的行事を見学することができた。

学生企画キルギス文化体験ツアーの3日間を通じて、教育実習生は学生から日本語でキルギスの歴史や文化に触れることができた。一方、キルギスの学生たちにとっても、これまで身につけた日本語を最大限に生かしながら、キルギスの情報を発信するという良い実践機会となったようである。事後調査から「学生からの一方的な説明ではなく、実習生から授業に必要なキルギス事情・文化を学生に聞くことができた」と、学生と実習生間で双方向的な交流があったという回答があった。文化体験ツアーをプログラムに入れることで、双方の学生にとって有益な学びを組み込むことができたと捉えている。

## 7. 事後報告会の実施

日本帰国後は、帰国前に提出された「教育実習録」をもとに、指導教員グループで実習を総括したコメントを書き、実習生に返却した。また、4月25日に鳴門教育大学で教育実習報告会を開催し、教育実習の成果や課題を実習生自身が報告した。報告会には、鳴門教育大学関係者29名とビシケク人文大学の教員2名（西條、ジュヌシャリエワ）がSkypeで参加した。

## 8. 教育実習プログラムの総括と今後の課題

### 8.1. 教育実習プログラムの総括

教育実習プログラムは、教育実習を中心として、様々な体験を提供する機会である。これは、受け入れ大学としても、学生の日本語学習や異文化間交流、異文化理解等にとって有益な機会となる。受け入れ大学が実習生と自国の学生が接する機会を積極的に設け、交流を図ることが、双方にメリットを得ることができる有効な方策となるだろう。今回の実習でも、特にホームステイで実習生を受け入れた学生にとっては、学習した日本語を運用したり、ジェスチャー等を用いてコミュニケーションを図ったりしたことが貴重な体験となり、日本語学習のモチベーション向上の一助になったようである。

しかしながら、3週間という短期実習では時間的な制約もあり、実習生は多くの授業を見学できたとは言いがたい。実習生との交流が少なかった一部の学生からは「実習生と日本語で日本事情について話したかった」「なぜ私たちのクラスに見学に来てくれないのか」等の質問が寄せられた。今後、授業見学と並行して個別に実習生と接する機会を設定するなど、希望する学生が参加できる交流の形式を検討することも必要がある。

本教育実習プログラムの成果として、「日本語教育実習」「異文化学習・体験」「国際交流・地域交流」の3点が有効に機能したかを考察する。

「日本語教育実習」については、教育実習生は授業見学や授業実践により、初歩的な日本語教育の実践知を獲得できたと考えられる。特に、各実践後に行われた「授業検討会」は、実習生が自身の授業を客観的に振り返ったり、観察者からのフィードバックを得たりできる良い機会となった。授業実践以外では、日本語弁論大会や日本語教育セミナーに参加し、受け入れ大学以外のキルギスの日本語学習者やキルギス人日本語教員、日本語教育関係者と交流できたことが、キルギスの日本語教育事情を学ぶ機会を提供できた。

「異文化学習・体験」については、学内外での生活や文化体験ツアー、ホームステイ等を通じて、日本とは異なる文化を実際に体験する機会を提供した。これにより、キルギス文化を見聞するだけでなく、実際にキルギスの人々と接することができ、日本とは異なる習慣や文化に触れることができた。また、ただ体験するだけでなく、学生との交流を通じてキルギスの歴史や文化的な背景にも触れ、単なる施設見学・訪問にとどまらない効果的な体験ができ、貴重な異文化交流の機会になった。

「国際交流・地域交流」に関しては、授業やホームステイ以外で、日本語教育関連行事への参加を取り入



れ、学生や地域の人々と活発な交流を行えるように配慮した。実習生は、ロシア語・キルギス語（現地語）が流暢ではない、もしくはゼロレベルであるが、「阿波踊り」や「書道」といった文化体験を通じてコミュニケーションを行い、キルギスの人々と一緒に体験をもつことができた。また、在外公館広報事業や学外行事への参加により、実習先の大学生だけではなく、児童生徒やその保護者、初等中等学校の学校関係者など、日本語教育関係以外の様々な人と草の根レベルで交流することができたことも、収穫としてあげられる。

さらに、実習後にビシケク人文大学の教員からは、「教育実習生との交流によって学生の日本語学習や異文化理解に対する興味が深まり、これまでの日本人観やステレオタイプを脱するきっかけになった」「学生は教育実習生が自分と年齢が近く、同世代として親近感を抱いたようだ。学生と教師の中間的な位置付けの教育実習生に親しみを感じていた」「教員にとっても、教育実習生による授業実践、授業準備の姿勢は刺激になった。日々の授業改善、教材研究の重要性を再認識した」等の意見が挙げられた。

以上より、本教育実習プログラムは教育実習生だけではなく、実習先大学の教員・学生にとっても自身の日本観、日本語観、日本語教育観を相対化する機会となった、有意義なプログラムであったと言える。単なる教育実習に留まらない人的交流を多く取り入れたことで、国際理解の視野を広げる「人材育成」の機会とできたことも成果の一つである。なお、事前の交流や実習生の要望調査などを踏まえてプログラム作成を行ったことで、実習生と受け入れ先の大学にとって無理のない計画が実現できたことも付言しておきたい。

## 8.2. 今後の課題

本研究では、教育実習プログラムの開発と実践を通じて、キルギスにおける教育実習プログラムを考察した。今後は、教員、実習生、学生の意見を抽出し、教育実習プログラムの教育的効果を検証する必要がある。また、高崎他（2016）は、「日本語教育研修（教育実習含む）」「異文化体験・異文化学習」「地域交流・国際交流」という3つの観点に基づき、インドネシアの大学でのインターンシップを分析している。その結果、「インターンシップは、インターン学生の教育や経験のためだけではなく、受け入れ大学の学生にも日本語学習、異文化交流、異文化理解等の観点から、利益を供与することが期待されている」と述べている。本実習でもそのような成果を挙げることができたが、実習生への教育効果とともに、受け入れ大学の学生・教員にとって実習がどのような効果を持つかをさらに詳細に検討し、実習生・実習生派遣大学と実習先大学の両

面から考察する必要があると思われる。さらには、実習先大学だけではなく、在外公館や現地の日本語教師会等の日本語教育関係機関と連携し、日本語教員養成のための専門的なプログラムを開発することが重要である。今回の実習の成果を契機として、より実効性のある実習プログラムの開発を目指したい。

## 参考文献

- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース・グローバル教育センター・グローバル人材育成推進センター（2014）『2013年度サウスウェールズ大学海外日本語教育実習報告書』、お茶の水女子大学
- お茶の水女子大学大学院日本語教育コース・グローバル教育センター・グローバル人材育成推進センター（2015）『海外日本語教育実習報告書 2014年度』、お茶の水女子大学
- 片岡朋子（2001）「日本語の効果的指導と異文化理解をめざした海外日本語教育実習の試み：インドネシア州日本語教育実習」『東京家政学院大学紀要 人文・社会科学系』41, pp. 189–196, 東京家政学院大学
- 高崎三千代・パラスティティ・ロニ・稲葉みどり（2016）「インドネシアの大学における日本語教育インターンシッププログラムの開発と実践への第一歩－」『教職キャリアセンター紀要』1, pp. 75–83
- 才田いずみ（2005）「言語研究者・言語教育者養成プログラム」『平成17年度魅力ある「大学院教育」イニシアティブ採択教育プログラム事業結果報告書』（[https://www.jsps.go.jp/j-initiative/data/sinsa\\_hum/a003\\_jigo.pdf#search](https://www.jsps.go.jp/j-initiative/data/sinsa_hum/a003_jigo.pdf#search) : 2016年6月5日アクセス）
- 富谷玲子（2007）「海外日本語教育実習における実習生の学び－国内日本語教育実習との比較から－」『日本語教育方法研究会誌』14（1）, pp. 60–61, 日本語教育方法研究会
- 中居順子・近藤扶美・鈴木真理子・小野恵久子・荒巻朋子・森井哲也（2005）『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』、スリーエーネットワーク
- 深澤のぞみ・令麗敏（2014）「グローバル人材育成としての日本語教師養成海外日本語教育実習の実践と成果」『金沢大学留学生センター紀要』17, pp. 43–65, 金沢大学
- 目黒真美（2009）『試験に強くなる！中上級学習者のための日本語読解ワークブック』、アルク